

死の床に横たわりて

《物》としての John Donne の生と死の身体

友田奈津子

はじめに

死と死者について思考を巡らし、表現を与えてきた文学の諸相を見ることを目的とした英米文学部門のシンポジウム、「幽霊を見る、死者の声を聞く——英米文学における生と死のあい」において、生の只中であって常に死を見つめ続け作品を生み出した John Donne (1572-1631)が描く生と死の身体を詳らかにすることで、17世紀英国の詩人による「死」についての語りに耳を傾けた。

挽歌や葬送歌といった直接死を詠う作品のみならず、恋愛詩、宗教詩においても Donne の眼差しの先には死すべき運命にある人間の肉体がある。聖なる「魂」は、塵を固めた「土くれ」である肉体に囚われているとするキリスト教的肉体観の中で、Donne は生きた身体を「生ける墓」と描く。《物》として描かれる身体への眼差しはしかし「死」という存在を「魂」と「肉体」との間に内在するものとして提示することで、伝統的な神学的身体論を超えていく。本発表では死を抽象的に描くことなく、リアルに人間存在の傍らに存在するものとしてみる Donne の身体描写を追った。

1. 土塊としての身体

人間の身体が地水火風の元素からなるという、西洋に連綿と続く人間知識の凝縮した議論が Donne の身体論の根幹にある。ギリシャ哲学、キリスト教神学は人間の構成要素が物質的な身体と非物質的な霊質からなると思做した。17世紀科学的革命の折に、脳が魂の座として提唱されてもなお、還元論者や無神論者でない限り人間性の要素としての非物質的な何かに対して、今でも人は重きを置いているが、霊魂の神聖さが事実として捉えられていた時代においては、この非物質的な部分を *spright*, *soul*, *mind*, *heart*, *consciousness* など多様な表現を用い、その存在について論が重ねられてきた。「魂」と「肉体」の関係について、「肉体は魂の牢獄である」と表現したプラトンを始めとするギリシャ哲学は、死とは魂の肉体からの解放であるとし、魂の持つ永続性を称揚した。またキリスト教では神の子が肉を纏われて人としてこの世に現れたとする聖書的観点から、本来肉体を軽視はしないものの、教父アウグスティヌス以降、原罪を背負った人間の身体はしきりに罪の深さを思い起こさせるものとして説教などで説かれ、心身二元論こそ神学の正当なドグマとして認識されてきた。しかし Donne は霊性の価値を認めながらも、物質的な身体をただ罪の穢れとしては語らない。

「自作の墓碑」と題される詩において、詩人は生前/死後の身体を、それぞれ「堅い土」(“*stubborne Clay*”)/「黄金」(“*gold*”)と表現する。身体はこの *clay* に加え、*dust*, *earth* という表現が与えられてきた。例えば *dust* によって人体が言及されたのは、創世記においてアダムが造られる際にはすでに、また *clay* についてもヨブ記において *dust* と相互交換可能な言葉として示されている。こうした身体すなわち土であるという連想は、初期近代以前より、塵から生まれて塵に帰るといふ、醜く脆い人間の身体を想起するのが伝統的な描写となされ、墓に入った肉体はやがて腐敗し、蛆虫の餌になるという描写が常套で、これは例えば時代と国を隔てた18世紀アメリカの国家創建の父 Benjamin Franklin (1706-90)が自作の墓碑銘にてにおいても、また発表者の池末氏が専門とされる Edgar Allan Poe (1809-49)においても1831年に公開された“The Sleeper”において、死の眠りにつく女性の柔らかい肌の上を這う虫について言及し、中世以来のこのイメージが長きにわたって広く好まれていたことが分かる。しかし、Donne はこのテンプレート化した死体描写を、常に身体に付与するのではなく、時として魂こそが虫の餌になるとする。腐食することなく黄金へと変化する土ないしは粘土で出来た身体に Donne は何を見ているのか。

2. 巧みに作られた身体

「人間は土塊だ、その中にすべての獣が練りこまれた土塊だが、知性がすべての動物が仲良くさせ、箱舟にするのだ」(1-2)と Donne は友人であり英国理神論の父として知られる Edward Herbert (1583-1648)に書簡詩を送る。人間の身体の中にはあらゆる動物が「練り込まれ」と、人間の体が粘土細工のように表象され、象られ得るのであるとする。また、どんなに多くの獣を練り込んだところで、それで出来た人間はむしろその獣性こそ強調され、汚れた身体を生み出すだけであろうに、「知性」によってこの身体はノアの箱舟にすることが可能であるとされる。人間の身体がたとえそれが罪の汚れた証である土で出来ているとしても、いや、物質的な土であるからこそ、捏ねられ、うまく成型され、あるいは耕されることにより実りを得られるという、Donne の人間観が土の

肉体を通して語られる。また Edward の弟で Donne の影響を受けたことでも知られる最高の宗教詩人の一人でもある Goerge Herbert (1593-1633)もまた、神の被造物である土塊からできた人間の可能性について謳う。Donne を中心に伝統的な身体観に新たな視点が織り込まれた描写がこの時代現れる。

3. 墓の中の身体

死後の身体、そして死そのものについて Donne は彼特有の豊かな詩的表現で語る。パトロネスであったマーカム卿夫人の死に際し作られた葬送歌において、「人間は世界であり、死は海である」(1)と人間と死の関係について、地球を舞台にした壮大なイメジャリを提出する。人間は陸地に喩えられ、死である海に取り囲まれ、脅威に晒されている。海は恐ろしい轟音をたて襲い掛かり、さらにそれが陸を侵食する様は「噛み切る」(5)という動詞が使われ、死の持つ獰猛さ、残酷さが、まざまざと描写される。とりわけ死が襲うのが自分の親しい人である場合、その喪失は体の一部が引き千切られるような痛みを伴うものであることが活写される。Donne のこうした海による死の表象は、しかし、まったく別な描写を生み出す。海は肉体を破壊するばかりでなく、その潮の流れはむしろ「泥のように汚れた浜辺」(16)を洗い清め、その代わりに波が砂の上に残していくのは、「美しく刺繍された模様」(17)であるとする。パトロンが相手とは言え Donne らしからぬ抒情的なタッチで死は描写され、死は人間にとってただ暴力的なばかりではないことが示される中、「中国の人たちは粘土を地中に埋めて、何世代もの間/じっと待ち、磁器として掘り出すそうだが、/それと似て、彼女の墓は蒸留器であり、彼女の肉体であったダイヤモンド、ルビー、サファイヤ、真珠、/黄金の山などを純化する」(19-23)と、まだ陶器の製造工程が東洋から伝わっていなかったこの時代、陶器は粘土を土に埋め、長年熟成させることにより得られるのだ、という当時信じられていた磁器の製法に言及する。「埋められた粘土」という提喩に誘発されて、ここで墓はまるで錬金術の操作で用いられる蘭引きのような役割を果たし、死体を純化し、不純物が取り除かれる場となる。この蘭引きの中で死体は「金」へと精製される。

4. 復活する身体

「自作の墓碑銘」は、墓の中で粘土から熟成され金へ変質という死の身体の描写によって、ただ定められた罪を背負い生き、恐ろしい死によってそれが強制終了させられると、後は墓の中で朽ち果てていくという肉体観と異なるイメージを提示した。土という物質の特性を生かし、鍛錬し良く生き、死に迎えられると聖なる肉体となり永遠の目覚めへの準備が整えられると Donne は身体の物質性に注目し語る。身体の物質性に主眼を置く Donne が生と死を考えると、身体性について言及するのを一歩も引かないのは、最後の審判の折、人間の身体も魂と完全に蘇るのだという復活信仰によるものであった。詩的表現の中で象徴的に表される黄金の身体となった死体について Donne は生涯拘り続け、聖職者となった後も死後の身体がどうなるのかについて、Edward Herbert の息子と支援者であったエッジアトン家の娘との結婚というめでたい席で、物質と化した死の身体について述べる。

One humour of our dead body produces worms, and those worms suck and exhaust all other humour, and then all dies, and all dries, and molders into dust, and that dust is blowen into the River, and that puddle water tumbled into the sea, and that ebs and flows in infinite revolutions, and still, still God knows in what *Cabinet* every *seed-Pearle* lies, in what part of the world every graine of every mans dust lies...

宗教的イメジャリによって語られる詩行においてはともかく、実際人間の体は腐敗を免れない。この説教で蛆虫の餌となり、その体内で分解され排出され、土に戻り、さらには塵となって世界に散っていくさまを Donne は詳述する。そして、塵にまで分解された身体を、神はその粒子一粒一粒の在り処をご存知なのだと言明する。復活信仰を裏打ちするかのよう、たとえ細かな粒子の状態にまでの身体が細分化されようとも、肉体の持つ確かな物質性によって、その一粒までのこの世界から失われることなく復活を果たすと Donne は説く。

キリスト教の世俗化が始まる初期近代、理神論のみならず、無神論までもが存在感を増す中、Donne は復活信仰というキリスト教神学の中心から人間の生と死について語る。Donne において神学は思考を固定化させるのではなく、躍動させるものとして働く。死を語る際、人間の身体は黄金となり、さらには粒子となって海の潮の流れに揉まれ、世界に拡散するというスケールの大きい幻想的な光景を描き出す。経験主義が台頭し、理性の時代を迎える前夜、Donne の死についての語りはキリスト教の教義に揺さぶりをかける時代の緊張感の中で生まれ、そのユニークかつダイナミックな描写は、のちの時代の読者をもその幻視の中に巻き込む力を持っている。